

# 武蔵野

本社 江東  
立川 武蔵野

武蔵野支局 〒180-0006  
武蔵野市中町1の13の1 3F  
電話 0422(51)3131  
FAX 0422(51)3133  
musasino@yomiuri.com  
都内版編集室  
電話03(3217)1465・1466  
江東支局 電話03(3631)6116  
立川支局 電話042(523)4477  
ホームページ  
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は  
**0120-4343-81**

【広告】読売Palette  
03(6272)9027  
【折込チラシ】 0120-03-4343  
【読売旅行】 03(5550)0666

8月25日(木曜日)  
旧 7月28日<仏滅>

■あすの暦  
通日 237  
月齢 27.4 (正午)  
=東京標準=  
日 出 5.07 満潮 3.21  
日 入 18.19 17.00  
月 出 2.38 干潮 10.02  
月 入 17.29 22.35 (中潮)

国民国家が「想像の共同体」であることが強調されるようになる1980年代よりもはるか以前から、五木寛之(1932年)は「幻想の共同体」や「植民地」という言葉を用いて世界と日本と「ふるさと」を考えていました。それは「大日本帝国の植民地」で育った「外地からの引揚者」という自己認識があったからです。そうした自己認識は、上京後に確立したと思われれます。

## 田無 上京者の支えに

文人の  
武蔵野

### 五木寛之 ④



五木寛之氏

52年の春、五木が早稲田大学に合格し、九州から上京します。上京したその日は早稲田大学の敷地で寝ようとして追い出され、近くの穴八幡宮をねぐらにします。しかし、夜になると恋人たちの睦言で賑わうので落ち着かず、神社

から神社へと転々とする生活を始めます。中でも「最も快適だったのは田無神社の床下である」と、エッセー「放浪」(「文藝春秋」67年4月)に記しています。五木は、同じ年の10月1日、誕生日の翌日、例大祭の日に田無を再訪します。そうした体験は、直木賞受賞後に書かれた小説「黄金時代」にも生かされます。五木にとっての田無周辺は武蔵野でした。武蔵野は、東京に接して東京ではない場所です、かりそめの「ふるさと」として上京者の心の支えになる場所でした。そうした地政学的な認識は、同じく九州から上京して学生時代に田無神社の近くで暮らしていた村上龍と似ています。村上龍は基地の街である佐世保で生まれ育っていますので、「帝国」に

も「植民地」にも敏感でした。武蔵野は、帝都と呼ばれる地でも植民地でもありませんが、軍都であり移民の地でしたので、彼らにとっては「ふるさと」に近い場所と感じられたのかもしれない。(敬称略。武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

#### おすすめの1冊

### 「風に吹かれて」

直木賞を受賞した1967年に「週刊読売」誌上で連載を開始したエッセーをまとめたもので、現在に至るまで460万部以上の売り上げを誇るベストセラーです。今あらためて読むと、予言の書だったのではありませんか、と思われる知見に溢れているのがわかります。

五木寛之  
(読売新聞社)